

小学校音楽科教育法における 表現「ふしづくりの教育」に関する考察（2） — 中家一郎・山崎俊宏の著述をとおして —

Elementary School Music Department Method of Education Consideration
(2) About Expression 'Fusizukuri Education': Through a Book of Toshihiro
Yamazaki and Working Papers

(2018年3月31日受理)

土師 範子 太田 正清
Noriko Haji Masakiyo Ohta

Key words : 小学校音楽科教育法, 表現, ふしづくりの教育, 中家一郎, 山崎俊宏

要 旨

昭和40年代「ふしづくりの教育」を実践研究し、全児童の音楽学習能力を伸長させたのは、岐阜県吉城郡古川町立古川小学校長であった中家一郎と音楽主任であった山崎俊宏を中心とした全教員であった。昭和42年4月1日古川小学校長となった中家一郎は自身の退職昭和50年3月31日までの8年間音楽科教育「ふしづくりの教育」研究を続けた。しかもこの8年間は国語科、算数科の授業研究も平行しながら行っていた。中家は、昭和46年度から49年度まで毎年全国の教員を対象に研究発表会（音楽拡大参観日）を実施し、全国から9,272名の教員を集めた。

また、山崎俊宏は昭和37年度から古川小学校に勤務し、岐阜県教育委員会から昭和41、42年度、音楽教育の研究指定校を受けた時は音楽主任をしていた。昭和42年度から中家の助言を得て「ふしづくりの教育」研究を進めた。

本研究は、中家一郎の著述「ふしづくりの教育」・山崎俊宏の著書「ほんものの音楽教育を求めて」から構成した。

I. はじめに

中家一郎¹⁾は昭和44年7月25日古川小学校発行の「ふしづくり一本道—基礎能力を培うために—」の巻頭²⁾で「ふしづくりの教育」の教育について次のように述べている。

昭和41年度、本校は県教委から「創造性の開発を目指し、ふしづくり一本道の実践」という課題で音楽の研究指定を受けた。このテーマは、県教委が過去数年間に亘って、県下に毎年研究校を設けて、音楽教育のあり方を研究された結果、発展的に生まれてきた課題であると聞いている。

県教委から課せられたこのテーマと取り組んで、41年度、42年度の2か年研究を続け、42年度にその成果を発表したが、確かにこの方法でいくと児童の音楽学習にた

いする意欲はすばらしく積極的になるし、ひとりひとりの児童の能力を驚異的に伸びることがわかった。

およそ、教育の目的が、望ましい人間形成を目指す以上、音楽も単なる音楽教科の指導ではなく、望ましい人間形成の一環としての音楽教育でなければならない。そのためにはひとりひとりの児童を大切に、充分なる能力開発をすると同時に、より豊かな情操をそだてなければならない。

音楽の教育も国語や算数と同様基本的な要素を順次積み上げていくことによって音楽の基礎的能力を定着させ、そこから創造性を開発して、将来、児童達が社会人となっても学習したことを基板として、発展的に自ら伸ばしていけるものでなければならない。

もともと、音楽の指導において教材を十分にこなしながら、その教材を通して音楽の基礎能力を順次積み上げ

ていくことが常道であると思うが、これには幾多の問題点もあって、一部の音楽教育の堪能な教師を除いて、音楽教育の目的を十分に達成することができなかつたように思われる。したがって、音楽ほど児童に能力差があり、発展性がなく、その開発に問題点が残されていた教科はなかつたように考えられる。これは、我が国の文化の発展ということから考えると残念なことである。

そこで、本校では、音楽の基礎を段階的に指導することを考えた。一見基礎指導と教材指導の二本立てのように思われるが、実際の指導にあたっては無理なく相互に結びついていく。そして音楽指導に堪能な教師でなくても誰でも指導できるし、児童も大変意欲的に学習していきます。

私は、この音楽の基礎能力の段階的指導によって児童達が、将来社会人になっても、必ずや発展的に自ら伸びて行くだろうと確信している。

II. 「ふしづくりの教育」について

ここでは中家一郎が昭和49年4月30日、自らの手書き(ガリ版刷り)による文書で古川小学校の教職員に配布し「ふしづくりの教育」について、自らが関わり、考えてきたことが述べられている。

1. 「ふしづくりの教育」の経緯について³⁾

昭和41年3月当初、中家は飛騨教育事務所の指導課長をしていたが、岐阜県教育委員会の山本弘⁴⁾指導主事から新年度の音楽の県指定は飛騨地区の番だから、飛騨地区で早急に決めて欲しい旨の電話があった。私は「私は音楽のことはよくわかりませんが、何処の学校がよいですか」と申しましたら「第一候補は小坂小学校だと思います。だめなら下呂小学校にさせていただきたい」ということであった。私は、早速小坂の教育長に電話した。するとその日のうちに、教育長から、小坂小学校は「音楽はとても受けられない。なんとか他校に変えていただきたい」と返事があった。そこで今度は下呂の教育長に電話した。教育長から「下呂小学校は僻地教育の県大会を実施し、その後始末もまだ出来ない有様だから困ります」と返事をしてこられた。

私は困り、飛騨教育事務所音楽担当の中村好明指導主

事に相談した。すると中村主事は「昭和41年度は古川で岐阜県音楽教育研究大会をもつことになって現在取り組んでいるから41年度はあてにできないが、42年度発表だから古川へ無理でも頼んだらどうだろうか」と言った。私はすぐに古川小学校の古田校長に電話した。すると古田校長は「よく解った。では、引き受けます」と即答された。私は少々心配となり「職員の方はそれでよいのですか」と言うと、古田校長は「私に任せて欲しい」と言われた。私は続けて今日のうちに県教委に報告しますが、よいですか」と言いましたところ「学校のことはよいが、このことを古川の教育長に連絡しておいて欲しい」とのことであった。私は古川の西村教育長に電話で依頼した。西村教育長は「学校でよいというならよいが、あまりお金のかかることは困る」とのことであった。私は「県から補助もあるし、お金は殆どかかりません。それでは、この件今日中に県教委に報告しますので、よろしく願います」と電話を切った。私は、すぐ県教委に報告した。中村指導主事は「それではもっと指導しなければなりません」と言い、頻繁に古川小学校に出掛けるようになった。

その年の秋、古川で県大会が開かれた。私は、古川小学校を見て、宮城保育園を参観し、古川中学校へ回った。盛大であった。好評であったが、私には解らなかつた。中村君がそばに居て説明してくれたが、うわのそらで聞いていた。大会が済んでからも中村君は度々指導に出掛けた。その都度「こんな問題点がある。あんな問題点がある」と話してくれた。

昭和42年3月、4月から古川小学校へ(校長として赴任)出ることになった。私は、古川小学校が音楽の研究指定校であることを忘れていた。

3月31日、教育事務所を引き払って、4月1日に本庁で辞令を頂き、帰宅した。2日、古田校長と事務引き継ぎをした。3日、宇都宮教頭が学級担任の相談にやって来た。教頭は「音楽の発表を控えているから、山崎君の希望もあって、山崎君をフリーにして全職員を指導してもらうようにしてある」と言われた。私は「それはいけない。音楽主任がフリーなど…。考え方がおかしい」と発言した。すると教頭は「全員授業をすることにしているけれど、まだまだこれからだから山崎君に指導してもらわないと授業など出来ないし、研究物も仕事があるし」

と言った。私は担当を組み替えてしまった。各学年に中心となる人を配置したのです。不満なようでした。しかし、今でも私は私のとった方法はよかったと思っている。

4月の第1回職員会議の時、山崎君が「今年度の音楽研究会は学級担任全員授業公開だから、校長さんから職員にそういう方針だと言ってください」と言うものですから、その通り職員に申しましたが、内心では研究発表会の時の授業は半分位できればよいと思っていた。

昭和42年4月1日、本庁の山本弘指導主事は角川小学校の校長になられたし、中村好明君は大西小学校の校長となった。本庁は、田中一昭先生、高山教育事務所は山下一男先生が主事となった。そこで私は山本先生、中村先生、山下先生に古川小学校へ指導に来て戴くことをお願いした。本庁の田中先生に年間5回古川小学校へ指導にきて戴くことになった。しかし、「5回は少ない」と思った私は「もっと指導してもらいたい」と考え、毎月3人の先生（低学年を中村先生、中学年を山下先生、高学年を山本先生）には来校指導をお願いした。以降華々しい研究が続けられた。私は三人の先生方が来校される度に研究授業を見たり、研究会に参加した。職員は月1回の参加でしたが、私は、月に低中高学年各1回の計3回勉強した。その間を縫って田中先生に指導に来て頂いた。そして、43年2月に研究発表を行った。参加者は約400名余であった。

2. 「ふしづくりの教育」について⁵⁾

県教委から研究指定された研究テーマは何であったのかよく知りません。温知小学校で日旋（日本旋法）の創作指導だったと思うが、田中一昭先生が文部省の委員になって基礎指導の原案を創っておられた。指導要領の改訂の一環として文部省で研究していたのです。従って、田中一昭先生は基礎指導ということを強く打ち出されていた。中村先生もそういう考え方が強かったと思う。しかし、山本先生はそうではなかった。従来の音楽教育の反省に立って、どのような方法で指導したら音楽能力を身につけることができるかということであった。けれどもやはり基礎を身につけることができるかということには変わりなかったと思う。当時山本先生が本庁にいる頃できていた基礎指導の段階表ができていた。それは13段階になっていたと思う。それを本稿の職員が拡充して30

段階とした。山本先生は音楽の三要素、リズム、メロディー、ハーモニーは家に例えれば土台と柱で一番大切だ。表現は化粧壁である。というようなことをしきりに申された。ですから、最初の発表要項には、「ふしづくりの教育」は骨組みも育てる教育だと書いてあり、今から思うと表現要素はおろそかにされていた。然し私は山崎君に表現は最高の最終的なねらいでなければ音楽の生命はない。山本先生の言われるのは従来、骨組みが出来ていないのに表現だけを問題にしていたので、特に強調されて申されるのであって、骨組みが出来たら表現の方へ入らなければならないと申しました。しかし、発表当時は表現に関してはお粗末であった。

「ふしづくり一本道」のサブテーマには今でも「基礎能力を培うために」と印刷されているのは、当時の名残りだと思う。

発表の翌年であったと思うが、大阪の指導主事と府音研の先生方が20名近く参観に来られた時、それから、堀川小学校の先生方が3名参観に来られた時、ともに表現に欠けている点を指摘された。その時も山崎君は表現は外装的なものだと言っていた。でも、そろそろ表現にも力を入れるべき時機に来ていた。

話は逆戻りするが、30段階に拡充したことはよいが、その指導方法は混沌としていた。そこで学習活動をどうしたらよいかということでいろいろな方法を各学年で研究した。私は、山崎君に100にして30段階100ステップと名付けた方がよい。と申し、丁度100にしてもらいました。それはその頃プログラム学習が流行していて、順次段階を踏んで自由に学習を進めていく方法がとられていたので、それからヒントを得たのであった。「ふしづくり一本道」には山本先生の考え方が多く取り入れられているし、ハーモニーの指導段階は全く山本先生の案から出発したものだ。

昭和46年度に全国を相手に自主研究発表会を行うことにした。46年度の参観者は600名か700名程度と予想していたが、実際は1,000名を超えていた。私は「ふしづくりの教育」は、単なる創作指導でもなく、単なる基礎指導を狙ったものでもないことを強調した。松本民之助さんの言われる統合学習はよく理解できないが、「ふしづくりの教育」は統合学習であると思う。

昭和46年であったと記憶しているが、音楽之友社から

「読譜指導」について原稿依頼があった。私は音楽教育の専門家ではない。原稿を書く力はない。ただ本校の行っている「ふしづくりの教育」では児童の読譜力はつくようになると答えた。音楽之友社は、その「ふしづくりの教育」について書いて欲しいと言ってきた。私は「ふしづくりの教育の理論と実践」を書き音楽之友社へ原稿を送った。音楽教育で論文を書いたことははじめてであった。然しその論文は反響をよび、私に多くの手紙や質問があった。私は、教育のあり方については考えていたので、その面からのみは答えることができた。

私は、教育については次のように考えていた。凡そ義務教育は学的理論を教えることではない。児童の経験(生活)を集約して、理論に近づける働きであると思っている。理科では自然の雑然とした事物現象を帰納して、自然の理法に気付かせるように指導している。ですから、小学校の理科の実験には実証実験をはじめから行うのはひとつもないのです。中学校には少しあると思う。高等学校は殆ど実証実験である。

松本民之助先生が来校、和音の裏付けのないメロディーなど音楽ではないと申されたことがあった。またその時「グループ学習など、あんな喧噪の中でやっても情操教育など出来ない」と申された。先般、岐阜大学の先生方が来校された時「発声が悪い」「フルートの指使いが悪い」「ふしづくりの時、間違いをもっと教師は指導すべきである」と申された。得てして、学者は「教育指導についてあまり解っていない」

義務教育は学問を教えることではない。このことは、義務教育現場の教員の中にも漠然と考えて人が多いと思う。

「ふしづくりの教育」は意図された楽しい遊び的な学校の中から知らず識らずに音楽的諸能力をからだにしみ込ませていく方法がとられている。音楽の教科書を教材にして指導している歌曲は、「ふしづくりの教育」だけでは充分でない点、即ち先人や専門家の作詞作曲されたもの、或いは世界や日本に昔から伝承されている文化遺産を学ぶことに於いて一層音楽を豊かなものにし、より高い情操に触れさせるためなのである。本校の音楽が二本立てであるという人がありあすが、二本立てで決してわるいことではないと思う。体育の時、走ることを練習してから幅跳びをやることと少しも変わりはないので

す。

「ふしづくり一本道」は山本先生指導のもとに本校の職員が創りあげたものです。今までどうしても音楽の能力を高めることのできなかつた厚い壁に突破口を切り開いたという点で突に画期的なものです。このことは日本のみならず、世界的にも注目的になる位の高いものです。これが契機となって小学校音楽教育が高まって欲しいと思う。例えそれが古川小学校が原動力であったということを知らなくてもよいと思う。私達はそうした自負をもって教育することに尊さがあるし、やがては小学校教育のあり方に新しい光を投げかけるものであることを信じてコツコツと歩み続けたいと思う。

III. 「ほんものの音楽教育を求めて」より

山崎俊宏⁶⁾は、昭和48年10月、「ほんものの音楽教育を求めて」を発売している。著書の中では、学校中の全ての教員が「児童達の音楽学習はどうやれば児童達が納得し、児童達の音楽能力の伸長をはかれるのか」を考え、実践した6年間の努力・悩み・喜び等が記述されていた。ここでは、昭和41年度～46年度の記録から考察した。

1. 音楽におけるグループ学習⁷⁾は可能なのか。5年生でグループ活動を取り入れた授業を公開してもらった。授業が終わると早速、先生方から「あんなにさわがしい音が出ていては、グループ学習どころではないのではないか」と批判的な話であった。

「ですが、一斉学習のみでひとりひとりの力を育てることは、無理なことであるし、グループ学習のさせ方によっては、音楽においても成り立つのではないのでしょうか」と議論した。「やかましくて、あれじゃ音楽でないぞ」「もっと静かにやれといっても無理でないか」いろいろ心配なこと、無理だと思われること、学習として考えねばならないことを申された。

しかし、先生方も、何とか、体育でもグループ別の指導が成り立っているし、ひとりひとりの力を育てる一方途として可能でないかと話し合い実践研究を重ねた。

ある日校長さんが「実はグループ活動の最中に児童達に、他のグループの音が邪魔にならぬか聞いてみたが、わしが心配していたことは必要がないようだ。児童たち

は、案外自分のグループ以外の音は気にしていないし、前に観た時と比べて、意欲的に音楽に取り組んでいた。あれならできそうだ」と喜んで話された。ともあれ我々の仕事は児童を育てることにありと痛感した。理論もそうだが、実践が大切であることを認識した日であった。

2. 本日は大変嬉しかった⁸⁾。先輩の先生が「俺がはじめて音楽の授業をやってみるで、部の先生方で観てくれ、そのかわり、いつS.O.Sを出すかも知れんぞ、その時は助けてくれ」と言って、授業をみせてくださった。授業後の研究会で「俺の授業にケチをつけないようでは、もうやらんぞ」と笑って話された。

この先輩の授業公開によって、初めての先生方も安心して授業をするよう踏み切ってくださいました。ありがとうM先生……。

3. 県より田中先生が訪問された⁹⁾。午後、全校研究会を開催。型通りの授業研究会のあとに、研修の時間をとった。「何か困っていらっしゃることとか、わからないことはありませんか」そのような事で話し合ったが意見はなかなか出てこなかった。やきもきしながらいると「意見が出ないのは、わからんことがわからんのだ」と強い口調で話された。「ドキッ」とした。特定の教科であるため、音楽などやらなくてもという考えは根強いものがある。気の短い私にとっては、暗い一日であった。何とか共通の基盤を作らなくちゃ、家に帰ってから頭の中は、その事ばかりでいっぱいであった。

4. 県大会の授業者を決める日である¹⁰⁾。古川町として授業者を決めなくてはならない。本校では2年、4年、6年の3名で、これはすぐに決めることができた。最後にどうしても決まらなかったのは3年生であった。第一候補の先生は「どうしてもやれない」と固く辞退された。教頭さん、校長さんと話してくださったが、どうしても駄目であった。やむなく本校で引き受けることになった。3名の先生の中である。決めなくてはならない。学年で相談してもらおうことになり、夕方やっと決められた。今年赴任したばかりの若い先生になった。こんなに難しい思いをしたことはなかった。

5. 県音大会の授業者が発表された¹¹⁾。決定するまでにはいろいろなことで大変であった。委員として選ぶのに苦しい思いもあった。しかし、今はそれが夢のような笑い話である。現在では、どの先生方でも、堂々と授業公開してくださるようになってきた。数年の間に素晴らしく伸びたものだ。

6. 南吉城の小中学校音楽会が済んだ¹²⁾。本校からは、1年生から6年生まで全学年参加した。これには、いわくがあった。それは2月の発表会には研究演奏をすることになっていたのですが、私は早めに演奏の準備をしておけば発表会間際になって、あわてなくてもよいだろう、それにリハーサルにもなるしと思って11月中に準備をしたのである。しかし、その頃「この忙しいのに音楽会に出るなんて」とか「無理なことや」などという声を聞いたものである。

だが、音楽会が終わって帰って来て「先生、本当によかった。早くから準備をしておいたので、これで研究演奏の方はうまくやれるという目途が立ったので、これからは授業のことを重点的に考えられるから」と言ってくれた女の先生があった。嬉しかった！ その一言が、とても今の自分にとっては、嬉しい言葉であった。

7. はじめて、子どもオペラ¹³⁾といえるかどうかかわからないが、それらしいものを手がけた。演技、歌、器楽と三者一体の難しさ、児童達も真剣であった。Y先生に演技の演出を頼み、観てもらった。やはりどこか違う。多忙な中放課後5日間も指導してくれた。中家校長さんも何回も観てくださり、いろいろ助言してくださった。「宝塚や日劇はよく観ましたので、それをヒントに申し上げる」と言われて、指導されました。どういう立場になられても、新しい、斬新なセンスを持つことは大切であると感じさせられました。

8. 発表会が終わった¹⁴⁾。田中先生は声をつまらせながら最後に講評をされた。長い間指導を受けた先生方が「ごころさま！」と手を取り合って喜んでくださった。この時ほど、古川小学校に居られたことを有り難く思ったことはなかった。校長先生はじめ指導主事の先生方のお力添え、同僚の先生方の協力、いろいろなお方の力の

結晶である。岐阜大附属小学校の先生が語られた言葉があった。「とても羨ましく感じた。私の学校では、自分ひとりのクラスなら負けはせぬが、全学級となると、とうていかないけません」……「そうだ、古川小学校の一番の特徴は全学級担任が自分のクラスの音楽の授業を行ったことだ」……ここが古川小学校のいちばんの特徴だ。

9. 「草ぶえ」¹⁵⁾ が完成した。児童の創作集である。1年生から6年生までの全児童の作品である。教員の印刷製本であるが、中身は素晴らしく、逞しさと生命力がある。夜遅くまでかけての原紙きり、印刷、製本と、部員の先生方ご苦労様！ 出来上がったとたんに、H先生「バンザーイ！ 第1号が完成した！」と大声を上げた。みんな手や顔にインクをつけて、よく頑張ったものだ。」

10. きょうも参観の先生方がみえられた¹⁶⁾。遠いお方は、九州だ。九州へは職員旅行で行ったことはあるが、古川からだ自動車20時間程かかる。あまり遠くて驚いたものだ。九州からわざわざ来て下さったのだから少しでもお土産を持って帰っていただきたい。S先生が「先生、お客様が見えましたよ。校長室へご案内しました」とお茶の準備をしてみた。

いつかの参観者のお方のお礼の手紙に、学校へ入ったとたんに玄関まで出迎えて下さった先生のこと、本当に嬉しかったと記されていた。4月の年度初めや学期末に見えることもあるが、誠意をもって、できるだけ親切に、お迎えすることも大切である。多忙であっても参観の先生方にお土産があるようにしたい。

11. 10月24日¹⁷⁾、いよいよ明日は、全国発表である。天気具合はよさそうである。星ばっている。

8時18分の急行で来られる先生方を駅で出迎える。M先生、S先生も寒いのに駅前の案内所で頑張ってみた。「ご苦労さま」「もうこれであとの列車でみえんやろな」「そうやな、この列車で最後やろな」そんな話をしながら、旅館へ案内する。M先生は車で「かまくら」まで行かれる、私は「蕪水亭」と「八ツ三」へ案内する。駅前へ帰ってみるとまだ二、三人の先生がみえる。M先生に「大進社へこれから行くので、あと頼みます」と高山へ向かう。「フラッ」と睡魔がおそった。「これはいかん、少し休も

う」と思って周囲を見ると「吉城薬品」の目の前であった。道路わきに車を止めて、一寝入りする。目が覚めて時計を見ると9時30分。「30分あまり寝たんやな」と思ってエンジンを回す。10時、大進社に着く。全員の方が残業で頑張っておられる「12時頃までに出来上がるというけれど」と心配そうである。資料の一部がまだ出来上がっていないのである。手伝いたいにも、どうやってよいかわからず、やきもきすること2時間、「一部できました、中身を調べてみてください」と言って一冊持ってこられた。明日発表内容の部分を一読する。

学校の宿直はT先生だ、電話を入れる「ご苦労さま」と、元気のいい声が返ってくる。「先生すまんけど、朝3時過ぎになるので頼むさ、いま突貫作業中やでな」「じゃあ玄関の戸は開けておくで」との返事。校長先生のところへも電話を入れる「どんなあんばいや、……そうか朝になるか、じゃあ朝早く行って袋詰めをするから」とのことであった。きっと寝ずに心配してみたのだなあ……。家に帰って、明日、いや、今日の授業の細案に目を通す、授業資料の点検……。先生方も今夜は、いろいろのことで寝られないんだろうなあ、発表会の盛会を祈りつつ床につく。

「カラッ」と晴れ渡った25日、いよいよだ……。

朝早くからつめかけられる先生方、参観の申し込みは700名程。「天気がよくてありがたかった」そう思いつつ校内をまわる。校内を一回り、不備なところはないか、必要な楽器などは万全か、どの教室からも「ピーン！」と張り詰めた空気が流れる、ニッコリと笑顔でOKのサイン……これでよし……。

山本、中村、松村、山下の先生方も「頑張ってください！」と一回りされる。「ふだんの気持ちをな」と声を掛けて行かれる。うれしかった！ 有り難いと思った。緊張し、上がり気味の自分が、落ち着いた。

授業が始まった。体育館はいっぱいである、夢中であった、鐘がなった、これで終わろうとしたら、女の先生から「ぜひみんなの作品を聞かせてほしい」との要望があった。こんなことは、初めてのことだ、どうしようか、迷う。……そこへ、後の方で、山本先生が「あとは昼食だからやりなさい」と声をかけて下さった……全部の作品を発表する……会場から拍手……児童とともに上気した顔でお礼を言う。研究授業で拍手をもらったのは、はじ

めてのことである。児童達も喜んだ。

12. 研究演奏が始まった¹⁸⁾。心配していた時間は、予定通り順調に流れていく。1,000名以上の先生方が声ひとつたてずに聴かれている。「野麦峠」が始まる。力一杯の歌、シュプレヒコール、演奏、「明治の初め、飛騨から信州へ糸ひきに越した女工の物語」、もり場へと進んでいく。私は、児童達の真剣な表情、いつもは、わんぱくで困り抜いたあの児童までもが力いっぱい表現している、じーンとしてくる。涙があふれ出るのを、どうすることも出来なかった。「よくやってくれた」照明のK,T先生、放送担当のY先生もハンカチで目を拭いている。思いは同じだ
 ……会場からもすすり泣きの声がする。最後の「さよならの歌」会場から拍手の嵐、拍手で退場。

13. 授業を見ていると¹⁹⁾、マナー化が目立つことが多くなってきた。なんとかいろいろ工夫して脱皮が必要と思う。委員会を開いて「何とかアイデアはないものか、低学年も高学年も同じような形態の授業が多いけれど」と話し合うと、きまって「そうは思うけど、わからんのやし、基礎的な力がないので…」と返ってくる返事はいつも同じである。ときどき授業を見て「あのような場合、こうしたらどうだろう」と話し合う。委員の先生方には、いつも無理な注文をする。心の中にあせりがあるのかも知れない。でも児童達は日々成長しているのである。2年前の6年生と今の6年生とは全然違う。なのに、内容が変わっていないのでは進歩がない。教師が、次へ発展していくような、手立てを講じることが大切なのではなからうか——いつも話題は決まってそのことであった。…しかし、口ぐせのように「そんな無理なこといってもできんし、わからんのや」と言ってみえた先生が「この頃になって、やっと先生の話してみえたことが少しわかりかけてきた。確かに児童にやらせずについて、頭からこんなことは出来ないと決め込んでいた。児童の無限の可能性を引っ張り出してやること、つまり実態をよく見つめ、ひとりひとりの児童に合った「刺激」を与えることは、教師としての大事な仕事であるな」と言われるようになった。

どのような内容で、どのような手立てで「しげき」を

与えていくか、絶えず新しい感覚で児童に接したいものである。

14. 「児童の動きがすばらしい」²⁰⁾と参観者が話され「でも全員が一つの型にはまっているのではないか」と言われた。即興的に身体反応させること、より音楽性深いものへと発展させていくこと…など考えると難しいことである。各自が思い思いのまま反応するとまとまりがないようにも感じられるし、みんな同じように反応させないとスッキリした感じになれない…などと迷うことが多い。反省の一日だ。

15. 文部省の真篠先生が本校を参観²¹⁾してくださった。指定校でもないのに、参観してくださるのは光栄である。それは、校長先生をはじめ諸先生方の努力の賜である。しかし、本日の授業は1年生から6年生まで見て戴いたけれど、どのクラスも、楽しさが薄く、活気がなかったらしい、少々固くなっていたのであろうか。何回授業をやらせてもらっても、前回がうまくやれたからと安心は許されない。絶えず児童は変わっていく、斬新なアイデアと、準備、実態把握が大切だ、今更言わなくても当然のことながら…油断大敵であると痛感する…。

「初心忘るべからず」「謙虚な気持ちを大切に」…

反省することばかり、もっとしっかりしなくちゃ…。

16. ある日の授業参観²²⁾の時のことであったが、参観者の方が「今日は感心させられたことの一つに、低学年であったけれど授業中急に雨が降ってきたら、一人の男子児童が学習の途中にソーッと窓を閉めていた。他の児童の邪魔にならないように、雑音を入れまいとして静かに閉めた。この時、私は、音楽が生活に結びついているな…と思いました」と語っておられた。

音楽の学習が他の学習へ…また他の学習でよいものは音楽でも…と、共通していくように深めたいものである。

17. 9月1日付けで、先生がお見えになった²³⁾。退職された先生があったからだ。その先生は教員としての経験はないお方であった。拡大参観日10月25日まで2か月なかったのである。

しかしながら、当日は、アコーディオンを弾きながら、堂々と授業をされた。話によると「どの先生がその方なのかわからなかった」と参観者の先生方が言っておられたとのこと。児童と共に進める「誰にでもできるシステム」を実証してみせた。

子どもの興味関心を引きつけるためにできる施策²⁴⁾の一つである。

20) 同 前 p. 121

21) 同 前 p. 121

22) 同 前 p. 122

23) 同 前 p. 122

24) 小野文子, 廣畑まゆ美 (2015) 「音楽科の教材研究の課題」中国学園大学紀要

引 用

- 1) 三村真弓 (2013) 「岐阜県古川小学校におけるふしづくり教育の理念と指導法の特徴」広島大学大学院教育学研究科紀要 第62号 p. 348
- 2) 古川小学校 (1969) 「ふしづくり一本道—基礎能力を培うために—」古川小学校 p. 1
- 3) 中家一郎 (1974) 「ふしづくりの教育について」古川小学校pp. 1-2
- 4) 1937年, 岐阜県師範学校卒業。岐阜県公立小中学校勤務を経て, 岐阜県教育委員会指導主事 (在職5年) を経て, 岐阜県公立小中学校長を勤める。「ふしづくりの教育」指導者
- 5) 中家一郎 (1974) 「ふしづくりの教育について」古川小学校pp. 2-4
- 6) 三村真弓 (2013) 「岐阜県古川小学校におけるふしづくり教育の理念と指導法の特徴」広島大学大学院教育学研究科紀要 第62号 pp. 348-349
- 7) 山崎俊宏 (1973) 「ほんものの音楽教育を求めて」古川小校 p. 115
- 8) 同 前 p. 115
- 9) 同 前 p. 116
- 10) 同 前 p. 116
- 11) 同 前 p. 116
- 12) 同 前 p. 117
- 13) 同 前 p. 117
- 14) 同 前 p. 117
- 15) 同 前 p. 118
- 16) 同 前 p. 118
- 17) 同 前 p. 118
- 18) 同 前 p. 120
- 19) 同 前 p. 120